SAMPLE

# 熊　雄

杜江 馬龍

彼はもちろん人間である。

彼の名前を熊雄という。

彼は生まれ落ちたときから普通の赤子ではなかった。

熊雄は昭和二十四年十月、北海道の太平洋に面したある岬の五軒ほどしか無い小さな集落で生まれた。その岬の周りの海辺はゴマフアザラシの生息地であり、昆布の採れる漁場であった。彼が生まれる時、大層な難産であった。生まれ落ちた赤子を見た産婆が、驚きのあまり大声を発したほどだった。彼の父親の名前を達雄と云う。父親は熊雄が生まれる前、落ち着きがなかった。初めての子である。ソワソワと落ち着きがないのも当たり前だった。

昨夜から風雨が酷く、海岸線の国道から少し高台の小さな掘立小屋は、今にも吹き飛ばされそうにギイギイと唸りながらも、何とか踏ん張っていた。外では気味が悪いほどヒューヒューと風雨が激しくなっていた。





掘立小屋の中では、昨夜遅くに達夫が妻のヨシの産気づくのを潮に隣村の産婆を迎えに行き、詰めていた。夜も白々と明け始めた朝の五時前であろうか。ヨシは生む苦しみの真っただ中であった。

「あともう少しだ。達夫さんよ、湯を沸かしてけれ」

達雄はストーブに薪木を入れ、鍋に一杯水を汲みストーブにかけた。そして外の昆布小屋から大きなタライを運び入れ、布団の傍に置いた。

「達夫！　何ソワソワしてるんだ！　ヨシさんの傍で声を掛けてやれ」

産婆は、もうすぐ生まれてくる赤子が小さな頭を出し始めたところで大忙しの中、幾分苛立ちながら達雄を睨んだ。

明け方の外では、相変わらずゴーゴー・ヒューヒューと風と雨が荒れ狂っている。ヨシは陣痛の中で生まれ出る赤子に不吉な予感がよぎったが首を横に振りそれを打ち消そうとした。『五体満足であるように』痛みの中でもそれを気にしていた。初産である。達雄は妻と同じ痛みの中でヨシの手を握り、必死に耐えていた。

「オギャー・オギャー」やっと生まれた。

産婆は出てきた赤子の姿を取り上げると同時にワ―と